

# 『新生』の宗教性\*

金 希 中\*\* · 林 盛 奎\*\*\*

---

## 目 次

---

- 1.はじめに
  2. 「新生」の宗教性
  3. 節子というモデルの設定
  4. おわりに
- 

### 一 はじめに

『新生』の研究成果の概観について言えば、渡辺憲や薮禎子の研究史<sup>1)</sup>がすでにあるが、両氏ともに、『新生』が評価の困難さや烈しい賛否にさらされた作品であることから論をはじめ。薮禎子の例示にしたがって言えば、従来の代表的な「新生」論としては以下の成果がある。

苦悩に鍛えられた主観が宗教的恍惚に達するほどに高調されたという正宗白鳥<sup>2)</sup>。「少年時代に養はれたキリスト教的理想主義の甘さ、その甘さを知りながら、それに目をつぶつて、太て太てしい四十歳の自然主義リアリストが、頭から引つかぶつてゐるといふ、居直りの虚勢」<sup>3)</sup>と決め付け、藤村の人格に対する不信を表明している広津和

---

\* 이 논문은 2006년도 동남보건대학 교비학술연구비에 의해 작성되었음

\*\* 동남보건대학 관광일어통역과 부교수, 일본근·현대문학

\*\*\*백석대학교 어문학부 일본어전공 부교수, 일본근·현대문학

1) 渡辺憲 「『新生』研究史」 (『新潟大学国文学会誌』昭和五六年二月) 「薮禎子藤村研究史」 (『一冊の講座・島崎藤村』昭和五八年一月、有精堂)、pp.198-211

2) 「島崎藤村氏について」 (『中央公論』昭和元年十月)

3) 「藤村覚え書」 (『改造』昭和十八年十月)

郎。また戦後いちやく『新生』を評して、「一個純正な芸術作品として」<sup>4)</sup>は認めなかった平野謙。一方、『新生』の緊密感の強さと藤村の作品の中でも最も量感の溢れる力作として評価する渋川驍(平野説に対する言及はない)<sup>5)</sup>。このように『新生』の評価は様々な分裂と反響を呼び起こしてきた。

笹淵友一は『新生』の主題構想に関する問題点を取り上げ、詳らかな分析を通して、平野説の問題点を追究してきた。藤村文学史を「リアリズムとロマンティズムの二様式の循環によって成立」<sup>6)</sup>していると見、『新生』はロマンティズムへの回帰であり、これは晩年の『夜明け前』『東方の門』に至るまで継続すると見ている。伊東一夫は、「これまでの一切の『新生』論をそのままにして、全く私独自の調査と見解において、私の立場よりの『新生』論を構築する」という前提条件の、『新生』は「単純素朴な生活記録や告白録ではなく、浪漫的長編叙事詩または散文詩とみなす」べきであり、「独創的な藤村美学の世界を築き上げた傑作である」<sup>7)</sup>と評している。こうした状況の中で、相馬庸郎は、『新生』に「芸術的秩序が存在」していることを明らかにし、「デカダンスの世界から痛切な愛の世界への再生」<sup>8)</sup>という重要な主題を読み取っている。

十川信介は、作中と実生活の連続性によって『新生』が支えられて、「作中と実生活の連続性をみごとに方法化した」<sup>9)</sup>と評している。

いま、『新生』論は平野説の述べる私小説的方法から様々な展開を見せはじめているが、ここでは『新生』の宗教性に焦点を絞って、さらに追求してみたい。

## 二 「新生」の宗教性

大正七年五月から翌年十月まで「東京朝日新聞」に連載された『新生』は、発表当時から作品批評の困難さから大きな反響を起した。藤村におけるキリスト教受容という観点から考える時、そこにはさまざまな解釈が派生する。

亀井勝一郎は言う。

4) 『島崎藤村』(昭和三二年十一月、五月書房)、p.95

5) 『島崎藤村』(昭和三九年十月、筑摩書房)、p.75

6) 「新生論」(「国語と国文学」昭和四二年五月)、p.16

7) 『島崎藤村研究—近代文学研究方法の諸問題—』(昭和四四年三月、明治書院)、p.595

8) 「『新生』試論」(「日本近代文学」昭和四四年十月)

9) 『島崎藤村』(昭和三五年十一月、筑摩書房)、p.189

「新生」は日本文学上に稀な「悪魔」を登場させる可能性をもつた作品だと思ふからである。それは宗教文学の可能性を内在させてゐることと同様である。10)

そして「藤村が青年時代に心に戦つた宗教と芸術のささやかな相剋が、『新生』をかいたときの彼の胸に去来してゐたことは明らかだ」と評している。藤村文学の一生を支配した霊肉の葛藤が「新生」にいたって、その山場を迎える。

作家にとって、作品の素材や表現上の内容は〈芸術〉、すなわち文学上の問題である。一方で〈宗教〉はきわめて作家個人の内的問題といえる。この点について伊東一夫は、

「新生」の創作の心理過程においては、作家にとって告白による傷心の癒しがあったけれども、作品として発表された「新生」は文学であつて、宗教的な懺悔告白とは別物であるということである。即ち告白としての作品の前には、いかなる形でも神は存在しない。もし存在するなら作者の心の内部だけである。11)

と指摘している。多くの苦痛と艱難を背負つてフランスへの旅に出、「自分のやうなものでも、どうかして生きたい」と叫び続けた藤村は、ここに来てまたも人間的な自己を生かした新生への道に至つたのである。

『新生』の宗教性という観点から、幾許の意見が出されている。

〈新生〉という言葉の概念については「無常の宗教から蠱惑の芸術」への志向を志す序章をめぐつて、それを中心テーマとする藪禎子の指摘があり、「『新生』にかけた藤村の初志は『序章二』のような境地を、作品として実現させるところにあつた」とし、「『新生』とはすなわち蠱惑の生の発見を意味していた」12)とする。しかし、下山嬢子13)の指摘のとおり、「新生」は、二人の愛の昇華をもって作品世界が終わつてゐるのではなく、二人の離別をもって作品が終わつており、岸本は節子との別れを前提にして「懺悔」を書き始めているのは明らかである。また、佐々木雅発はリモージュでの感慨によって岸本は「人間にとってこの世の存在は一切空無でしかないことを知り、「山川草木とともにひたすら四季のめぐりに随順しつつ」「この生を耐える、あるいは越える緑を垣間見た」と言い、「この世を生きる日本人のもっとも基本的、本質的な生き方であり、〈宗教〉といつてゐるならば、〈思想〉というべきものである」14)と述

10) 『島崎藤村論』(昭和二八年十二月、新潮社)、p.201

11) 同註7、p.597

12) 「『新生』の基本構造」(『藤女子大学国文学雑誌』昭和四九年五月)

13) 「『新生』の〈宗教性〉」(『日本文学』平成四年十二月)

べている。関谷由美子は折口信夫の「もにこもる」<sup>15)</sup>という文章を引用しながら、フランスへ発つ時の「苦難は最初より期するところで、それによつて償い得るものなら自分の罪過を償ひたい」（一の八五）、帰国の壮途につき「還るのを赦されるのだ」

（二の一）という二つの特殊な心的構造は「古代民俗信仰による〈籠りと復活〉の秘儀が潜められている」ことを見透かすことによって理解可能になると指摘する。つまり、「〈春待つ心〉〈旅の心〉〈幼い心〉の高まりが『還るのを赦されるのだ』という岸本の奇妙な自意識を支えている真の要因なのである」と言い、神道的概念の論を展開し「全編を通じて際立つ岸本の、宗教（仏教やキリスト教）への無関心さはこの作品の深層の神話的性格を暗示する」<sup>16)</sup>と言うのである。

しかし、リモージュにおいての体験や、帰国後の節子との〈新生事件〉の再燃を「隣人」<sup>17)</sup>というキリスト教思想において岸本が体験していくことを見ると、「四季のめぐり」に随順しつつ、この生を耐えている彼の姿は「日本人」の〈宗教〉、〈思想〉とはほど遠い感があり、「宗教（仏教やキリスト教）への無関心さ」は「神秘的性格を暗示」するという指摘も首肯し得ぬものがある。

一方、下山嬢子は、『新生』の宗教性の所在を「海の洗礼」を受け「心の革命」（「故国を見るまで」）を引き起こし、藤村のフランス体験が異文化の交渉を越えて世界認識、人間認識の枠組みの転換を余儀無くさせられた根本的に重要なものであったと指摘し、『新生』の宗教性とは「最もキリスト教（特に前論で言及したように、マリア像の象徴性などからカトリック）に近いといつてよく、それは決して仏教や神道のイメージではない。が『桜の実の熟する時』の捨吉が望んだように『もし真実に洗礼を受けるなら是からだ』（四）と岸本が新たに受礼の意志を示すわけでもないし、特定の宗旨、宗派との関係が指摘されているわけでもない」と述べ、『新生』の宗教性とは、「形式を超越した、実質的に最もキリスト教（カトリック）的な恩寵体験とも呼ぶべきものとして岸本に体験された」<sup>18)</sup>ものとして理解されている。

『桜の実の熟する時』の前章（一章から五章）は、パリの客舎で、あるいはリモージュの田舎で書き改められており、後章（六章以後）は〈新生〉事件の再燃の時期に書かれた。四章は信仰生活者として、もっとも敬虔な神を求める信仰告白と祈りが描かれている。〈新生〉事件の贖罪の旅としてフランスを選んだ藤村は、第一次世界大戦という戦乱に巻き込まれる。この落ち着かない状況の中でのリモージュへの転居

14) 「『新生』の旅―帰国前後―」（『パリ紀行』平成元年十二月、審美社）

15) 「上代葬儀の精神」（『折口信夫全集』第二十巻、昭和四二年六月、中央公論社）

16) 「『新生』の神話構造」（『日本近代文学』平成三年十月）

17) 「リモージュ往還―『新生』論（その一）―」（『大東文化大学紀要』平成四年三月）、p.190

18) 同註13

は、「私には静かな空気の好いところへ行つて仕事をしたいと思ふ心があり、かねて心掛けて居た仏蘭西の田舎を初めて見るという楽しみ」を伴っており、創作の場所としてちょうどお誂え向きだった。〈新生〉事件の後、フランスでの経験が藤村の〈新生〉の動機を付与したことはいうまでもない。リモージュでの生活は藤村に宗教的情調を起こさせる。特に、サン・テチェヌ寺院を中心とする宗教的雰囲気は、藤村を「静かな建築物の中で自分のたましひを預けて行くことを楽しみに」（『新生』一の一〇三）させた。そして「唯彼は石の柱の側に黙然と腰掛けて、仮令僅の間なりとも『永遠』といふものに対し合つて居るやうな旅人らしい心持ちに帰つて行つた」（『新生』一の一〇四）。彼はカトリックの美的世界に心をひかれるとともに、カトリックの信仰そのものに関心を寄せる。サン・テチェヌ寺院の宗教的なものとのかわりには、『桜の実の熟する時』の第四章に描かれた捨吉の信仰告白と祈りにつながりがある。プロテスタントキリスト教から離れた藤村にとって、カトリズムの国フランスは、まさに彼の心を生かす再生の場所であった。フランスでの生活の中で、リモージュにはわずか三ヶ月の滞在であったが、藤村が最も純粋な心情で神に接近したのはリモージュにおける生活であった。ヴェンヌの河に近い田舎の二階で書かれた『桜の実の熟する時』の第四章が、他の章に比べると信仰告白の重要性、祈禱の問題など、藤村の宗教に対する真実性、誠実性がより明らかに描かれているのは当然である。

キリストに向かった自己を見つめて、神を慕って生涯を送ろうとし、熱い涙を流した藤村は、神の周辺をさまよう子羊のような姿勢を取りながらも、ついにキリスト教の神の再臨—あくまでも文学的な—を見ぬまま『若菜集』的世界に見られる東洋の詩人の憂鬱と寂寥感に満たされていったのである。藤村は、芥川竜之介の「老獺な偽善者」という批判に対し、「芥川君は懺悔とか告白とかに重きを置いてあの『新生』を読んだやうであるが私としては懺悔といふことにそれほど重きを置いてあの作を書いたのではない」「生きながらの地獄から、そのまゝ、あんな世界に生き返る日も来たと言つて見たいつもりであつた」<sup>19)</sup>と、自らの心を素直に書いている。『新生』は〈懺悔〉〈告白〉に重きを置いたものではなく、「罪からの再生と霊の世界に憧れる序曲として捉える」<sup>20)</sup>べきであり、地獄から抜け出し煉獄の世界に身を置こうとする藤村の文学であった。

### 三 節子というモデルの設定

19) 「芥川竜之介のこと」（『市井にありて』）

20) 同註7、p.594

次に節子というモデルの設定について述べる。節子は「重い石の下から僅かに頭を持ち上げた若草のやうな娘であつた。曾て愛したこともなく愛されたこともないやうな娘」で、「彼ゆゑに傷ついた小鳥のやうな」女性である。岸本が作品として『新生』を発表する時に、彼女は「黙つて置きさへすれば、もう知れずに済む」というようにしか自己主張を示すことができない。岸本の帰国の際、叔父が彼女の存在を無視して、再婚話などに耳を傾ける時、「節ちやんの低気圧」という〈濃い憂鬱〉と沈黙だけで自己の意思と抵抗を表す女性であつた。

平野謙は「ひたすら忍従し、献身する一種聖女めいた倅をもつ女性として描かれてゐるが、おほ根のところ、ありふれた凡庸な婦人にすぎない。どんな女でもそなえてゐる女性特有のリアリズムと虚栄心と負け惜しみとをつつましやかなオブラートにつつんだインテリ婦人にすぎなかつた」<sup>21)</sup>と厳しい評価をくだす。相馬庸郎は「まさしく≪異常人格≫であるがゆゑに表現させることのできた美しい形象」<sup>22)</sup>とする見方を示す。下山嬢子は「節子は役割上、泉太・繁の〈母〉としてのそれを担い、その子供達の父である岸本と実質上の〈夫婦〉の関係を結ぶという形になる」<sup>23)</sup>と言い、旧家に束縛された近代的個人の悲劇や墮落としてではなく、その「血から解き放され、肉から解き放されていく」（『新生』二の一五）プロセスこそが〈新生〉のタイトルにふさわしい内実であると説く。そして、岸本がそのために渾身の力を入れ、どれだけ大きな犠牲を払わなければならなかつたか。また、そのことによって、親族的愛の力の強さに自分が今までどれだけ依拠していたかに気付かせられていくということを見ておくべきだと述べている。

リモージュでの宗教的体験は岸本にとって「もともと宗教に接近していたように見える」と言える。しかし、この体験は帰国後まで持続せず「岸本の告白は、全能の神のまえにひざまずいて罪を懺悔という意味での宗教性をうしなつ」<sup>24)</sup>ていると指摘している。それに対して、下山嬢子は「帰国後の岸本が節子を愛せる自分を発見し、その事実の認識によって≪リモージュ体験≫の意味に眼覚めていく」<sup>25)</sup>というのだが、同感である。

岸本が節子とのことを「浅草時代の終」りのデカダンス生活として考え、節子とのことをデカダンスの生活のなかに咲いた「罪の花」のように考えたのは、フランスへの旅の時だった。ここに来て岸本が「浅草時代の終」（二の七二）りを振り返っているの

21) 同註4、p.107

22) 「『新生』の試論」（『日本近代文学』昭和四四年十月）

23) 同註17

24) 三好行雄『島崎藤村』（昭和五九年一月、筑摩書房）、p.255

25) 同註17

は、最近の生活がそうでないことを確認するためである。二人の「新しい愛の世界」が、デカダンスを超えた春の芽を岸本に思わしめたことになる。その中で岸本は、節子の生き方におぼつかないながらも彼女が宗教心を抱いているのを感じる。

岸本の眼には節子が、「今だ落ちつくところに落ちついて居なかつた」（二の九六）と見える。その「落ちつくところ」とは具体的には描かれていないが、宗教への帰依に進むことだと推測できる。岸本は彼女に『新約聖書』を贈り、また数珠を贈る。「いわば何でもよい宗教を拠りどころに、東洋的な静寂の境地をつくりだし、一種の悟達にいたることであった」<sup>26)</sup>と述べているが、私はキリスト教への傾斜であると言いたい。彼女は世間の通俗的な観念からは容認されにくい愛情関係を、宗教的に昇華させようとした。「汝等求めよ、さらば与へられん、尋ねよ、さらば遇はん、叩けよ、さらば啓かれん」から「わたしどもはきつと最後の勝利者でございますね」（二の六五）という聖書の句を用いて、節子は岸本との愛情を育てている。そこにはアベラールとエロイズの恋物語が反映されている。あの名高い中世の僧侶は、弟子であり情人である尼さんと、終生変わることのない愛情を交わしたばかりでなく、死んだ後までも二人で枕を並べて、古い黒ずんだ御堂の内に眠っている。このお伽話のような恋物語は、世間に認められぬ愛情をもって生きようとする二人に、強い感動を与えたのである。岸本が節子に聖書を贈ったのも、数珠を贈ったのも、アベラールとエロイズの恋物語の影響があったからである。この恋物語は彼等二人をアベラールとエロイズの世界に導く。

大きな悟りの心を想つて御覧、もし魂を淨くすることが出来るものなら肉を淨くすることも出来ようぢやないか—  
（二の七〇）

悟りの心と魂を淨くすることを勧めながら、岸本は二人の終生変わることのない恋物語を話す。この異国の物語は節子の精神を励ますものとなっている。この時の話は「男女の間の心の隔り」（二の七〇）も忘れようと、二人の心が一致していることを意識している。この世に何物も所有することの出来ない節子の愛は、「覚束ないながらも宗教へと辿り行かうとして居ること」を考えているのである。そこに岸本は「言いあらはしやうの無いあはれさ」（二の七六）を感じるが、節子はそこに幸福を見出している。

「長い間の苦悩から奈何にか斯うにか彼女を救ひ出すことが出来て、彼女を幸福にすることが出来るなら、それ以上の運命の弱い人間の力で奈何することが出来よう」と、節子の将来をどうしようも出来ないが、ただ見詰めて行こうとする態度に岸本は変わって来ている。

26) 瀬沼茂樹『評伝島崎藤村』（昭和三四年七月、実業之日本社）、p.256

岸本は自分の生命がしきりに彼女に向つてそそぎつつあるのを感じて居た。彼は趣味に於いても不思議なくらゐ節子と一致して居た。彼女の髪、彼女の着物などは誰のにも勝つて彼の好みに合つた。  
(二の七六)

ここにきて岸本と節子との関係は、アベラールとエロイーズの関係と絡み合つて展開する。岸本は肉の苦しみから出発した関係を精神的な愛の關係に昇華させようとする。少なくとも彼が辿り着きたいと願うのは、「多分に『友情』の混つた男女の間柄」(二の八八)であつた。一方、節子は精神的な信仰を背景に自分たちの關係を肯定していく。いわゆる「愛と智慧とに満ちたアツソシェ」を志向する方向にそれぞれが導かれる。「アツソシェ」とは生涯の伴侶という意味である。岸本は二人の愛情の生い立ちから言つても、これからの将来のことを考えても、このまま節子との關係を長く持ち続けることが出来ないことを思うようになる。「今迄のやうに窮屈な、遠慮勝ちな、気兼ねに気兼ねをして人を憚りつづけて来たやうな囚はれの身から離れて、もつと広い自由な世界へ行かすには居られない」(二の九二)という転機を作って、嘘で固めた生活を根底から覆し、吐露しようとする。岸本を懺悔＝告白へ導いたのは、節子に対する愛情だと言える。

節子は実際に宗教生活に入つて行く心支度を始めねばならないやうな話をして、彼女の前途の事などを語り暮らした。  
(二の一〇一)

可哀そうなほどに、日蔭者の自制と遠慮とに慣れた節子は、愛と誠実の精神が段々高揚し、明るい宗教生活への傾斜を始める。彼等の關係は、「黙つて置きさへすれば、もう知れずに済む」(二の一〇二)ことなのである。しかし、二人の關係を罪惡視した岸本と、愛の精華にまで引き上げようとした節子とは同じ苦惱を共にしながらも、これだけの差異があつた。節子は世間に自分たちの關係を知らせることを快く承諾し、「何時迄だつて私は待ちませう」と言う。そこで、岸本は「それは互いに心を許さない以前に言へることであつて、今となつては反つてそれを隠さないことが彼女のためにも真の進路を開き与へることだと考へるやうになつた」。このように考へるようになったのは、「今々奈何することも出来ないで居るものの本当の意味の解決が求められさう」(二の九三)で、「この人のために真の進路を開き与へないのは嘘だ」(二の九五)と思つたからである。ここに言う「真の進路」「本当の意味の解決」とはどういうものか。岸本の渡仏が贖罪の旅であつたことから分かるように、彼はインセストそのものが

罪であると認識している。が、節子はインセストに対する罪意識をほとんど感じていない。ただ一筋に岸本への愛を求めるばかりである。

岸本に言はせると、彼女の宗教心は、言はゞ心の芽だ。そのかはり彼女には子供の時分から無理に注ぎ込まれたやうな先入主と成つたものが無い。その心の芽が罪過から萌して来たところに、岸本は望みを掛けて居た。  
(二の一三一)

あたり前のことである。が、それを可能にするには「時」というものの力を待つほかはない岸本である。いまだに節子は、インセストに対する罪意識を〈掛け違ったボタン〉とする自己認識をもっていない。彼女は「神もし選び給はゞ、死して後なほよく愛することを得べし」(二の一二八)と考えており、「お父さんさえ亡くなれば春叔父さんの許へ行かれるものと思っておいでの様」<sup>27)</sup>で、岸本への永遠の愛情を抱いていても罪意識は持っていなかったのであろう。

節子の新生は「吾娘はわれに於いて処分する」(二の一二五)という父親の厳命の下に台湾に送られることではじまる。もっと広い「自由な世界へ行かれる」ことを望む岸本は、「奈何することも出来ないで居るものの本当の意味の解決を彼女と自分との告白の結果」に求めようとする。可哀そうに思い、一方は彼女のためにいいと考え、「確かに彼女の前途に進路が開けかゝつて来たことを」確信する。彼等の愛情の確信は不動のものである。

## 四 おわりに

藤村は、『新生』には結局何等の新生も無かったと後から反省するが、さきにのべたように、「新生」が新生であるというのは、それが未だに達成されないところにある。

笹淵友一は、藤村には「真の自己否定のモチーフがなかった。換言すれば自己肯定の根深さのためであった」と藤村の自己欺瞞を鋭く批判し、滝藤満義も「藤村における罪は常に社会に対する罪であったから、当然告白の対象も、キリスト者達のように神ではなく、世間(後九十四)つまり世の中であった」と言い、救済もこの〈世の中〉によってもたらされるものであると断定している。そして「新生」を藤村の「あせりと野心」からつむぎだされた作品としてみている。

懺悔＝告白とは「窮屈な、遠慮勝ちな、気兼ねに気兼ねをして人を憚りつつけて来

27) 四丸四方『島崎藤村の秘密』(1996年7月、有信堂)、p.148

たやうな因はれの身」から逸れるための懺悔＝告白であった。岸本は懺悔＝告白を節子に対する愛情の故であったという。その一方には、彼の苦い経験（フランスへの旅、兄・広助の掛引、礼奉公）があった。彼の言葉は、それに対する苦悩と二度も禽獣界に落ちたという無残な自覚に基づいていると言える。「最早僧坊生活の必要もなくなりましたから、御安心ください」（二の一二三）という節子への手紙でも分かるように、懺悔＝告白によって肉の卑しめから逃れようとする罪意識がある一方、このことを作品化するという岸本の酷い自己欺瞞があるのである。

岸本はインセストの関係からの脱却と新生の可能性を信じて生きる道を探り続けるのだが、結局はすべてを世間に公表するという手段をとる。自分を世間の眼にさらす行為により岸本の新生は保証される。滝藤満義の指摘にもあるように世間は彼にとっては神であったのである。「新生」という作品は、最初から神の登場を必要としていない。フランスへの旅でのカトリックの情調もアベラールとエロイズの恋物語も、神抜きの素材だけが必要であった。藤村にとっては世間が奇しくも神だったのである。徹底的に自分が悪魔になる必要ももちろん無い。

藤村が告白を通して求めたのは、新しい自己の生きる道であり、自己救済であったと言える。そこには自己の醜さを赤裸々にさらけ出す自然主義文学の信条が認められる。

しかし、彼の文学的営為は節子を社会的に葬ることになる。節子は世間に晒し者にされて台湾への旅を余儀無くされる。予想される結果の直視に欠けている藤村に世間は偽善を見、彼を老獺な偽善者とさえ決めつける。

自分の小さな智慧や力で奈何することも出来ないやうな『生命』の趨くまゝに一切を委ねようとした。  
（二の一四〇）

『新生』は「愛のまこと」だけが残り、岸本の「『生命』の趨くまゝに」進む方向は見えざる神への道であることも読み取れる。

我が父よ、もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給へ。  
されど、我が意の俣にとにはあらず、御意のままに為し給へ。

（「マタイ伝福音書」二六章三九節）

「わが心にあらず、御心のまゝに」（二の一四〇）は、節子の岸本宛ての手紙であるが、これは作者の告白後の気持ちでもある。ゲッセマネで死を迎えるイエスは、

苦痛と苦悩、葛藤の祈りをする。そのイエスの言葉を引用しながら、「御心」に「生命」を委ねる藤村であった。

ゲッセマネでの祈りの後、イエスはカルヴァリの山上において十字架にかけられ亡くなったが、「我は復活なり、命なり」（「ヨハネ伝福音書」十一章二五節）と言うことばを残した。キリスト教信仰は「イエスの死」によって終わるのではなく、死からの蘇り、復活の信仰から始まるのである。「生命」は生ける神という概念と結び付いている。命の核心としてのよみがえりの生命である。

御子を信ずる者は永遠の生命を持ち、御子に従はぬ者は生命を見ず、反つて神の怒り  
その上に止るなり  
（「ヨハネ伝福音書」三章三六節）

『新生』の主題はここに集約される。

『新生』の最終章には、ただ告白ということで終わらず、新たに一切を委ねた生を黙々と生き始める藤村の姿がはっきりと見える。そこから『寢覚』という三部作『夜明け前』のテーマが生まれる。

#### [付記]

島崎藤村作品の引用すべては、筑摩書房版（『藤村全集』）に拠った。

## 【参考文献】

- ・ 秋田雨雀編『島崎藤村研究』 楽浪書院 昭和九年十一月刊
- ・ 武藤直治『島崎藤村』 新陽社 昭和十一年四月刊
- ・ 島崎静子『藤村の思い出』 中央公論社 昭和二五年五月刊
- ・ 亀井勝一郎『島崎藤村論』 新潮社 昭和二八年十二月刊
- ・ 田中宇一郎『回想の島崎藤村』 四季社 昭和三十年九月刊
- ・ 久山康編『近代日本とキリスト教』一明治篇一 創文社昭和三十一年四月刊
- ・ 稲垣達郎『日本の近代文芸と早稲田大学』 早稲田大学 昭和三二年十月刊
- ・ 平野謙『島崎藤村』 五月書房 昭和三二年十一月刊、p.95
- ・ 吉田精一『自然主義研究』下巻 東京堂 昭和三十三年一月刊、p.194
- ・ 長谷川泉『近代名作鑑賞』 至文堂 昭和三十三年六月刊、p.151
- ・ 瀬沼茂樹『評伝島崎藤村』 実業之日本社 昭和三四年七月刊、p.201
- ・ 笹淵友一 「『文学界』とその時代」 明治書院 昭和三五年一月刊、pp.301-350

- ・ 村松定孝『島崎藤村』 角川書房 昭和三五年九月刊、p.90
- ・ 吉田精一『吉田精一著作集』六 桜楓社 昭和五六年七月刊、pp.117-125
- ・ 『島崎藤村』Ⅱ『日本文学研究資料叢書』 有精堂 昭和五八年六月刊
- ・ 「国文学解釈と教材の研究〈特集透谷と藤村〉」 昭和三九年六月刊
- ・ 「解釈と鑑賞」別冊 『現代のエスプリ島崎藤村』 昭和四一年五月刊
- ・ 「解釈と鑑賞〈自然主義と反自然主義〉」 昭和四三年九月刊
- ・ 「国文学解釈と教材の研究〈島崎藤村と日本の近代〉」 昭和四六年四月刊
- ・ 「解釈〈特集・島崎藤村研究〉」 昭和四九年七月刊
- ・ 「信州白樺〈特集藤村〉」 昭和五十年四月刊
- ・ 「解釈と鑑賞〈島崎藤村の再検討〉」 平成二年四月刊
- ・ 「島崎藤村研究」 「風雪」第一集～第十集
- ・ 「島崎藤村研究」 第五号 昭和五四年十二月刊
- ・ 「島崎藤村研究」 第十四・十五合併号 昭和六二年六月刊

K C I

## 要 旨

藤村は、『新生』には結局何等の新生も無かったと後から反省するが、さきへのべたように、「新生」が新生であるというのは、それが未だに達成されないところにある。

笹淵友一は、藤村には「真の自己否定のモチーフがなかった。換言すれば自己肯定の根深さのためであった」と藤村の自己欺瞞を鋭く批判し、滝藤満義も「藤村における罪は常に社会に対する罪であったから、当然告白の対象も、キリスト者達のように神ではなく、世間（後九十四）つまり世の中であった」と言い、救済もこの〈世の中〉によってもたらされるものであると断定している。そして「新生」を藤村の「あせりと野心」からつむぎだされた作品としてみている。

懺悔＝告白とは「窮屈な、遠慮勝ちな、気兼ねに気兼ねをして人を憚りつづけて来たやうな因はれの身」から逸れるための懺悔＝告白であった。岸本は懺悔＝告白を節子に対する愛情の故であったという。その一方には、彼の苦い経験（フランスへの旅、兄・広助の掛引、礼奉公）があった。今の社会ではインセストは許されないという。彼の言葉は、それに対する苦悩と二度も禽獣界に落ちたという無残な自覚に基づいていると言える。「最早僧坊生活の必要もなくなりましたから、御安心ください」（二の一二三）という節子への手紙でも分かるように、懺悔＝告白によって肉の卑しめから逃れようとする罪意識がある一方、このことを作品化するという岸本の酷い自己欺瞞があるのである。

キーワード：藤村、新生、自己欺瞞、懺悔、告白、苦悩

투 고 : 2006. 5. 31  
1차 심사 : 2006. 6. 10  
2차 심사 : 2006. 7. 1

住 所：水原市 長安区 亭子3洞 872-1 風林Apt 411-404  
電 話：(017) 350-2794  
e-mail：josepk04@hanmail.net

住 所：天安市 安棲洞 115 白石大学校 語文学部 日本語専攻  
電 話：(041) 620-9417  
e-mail：imsung@cheonan.ac.kr